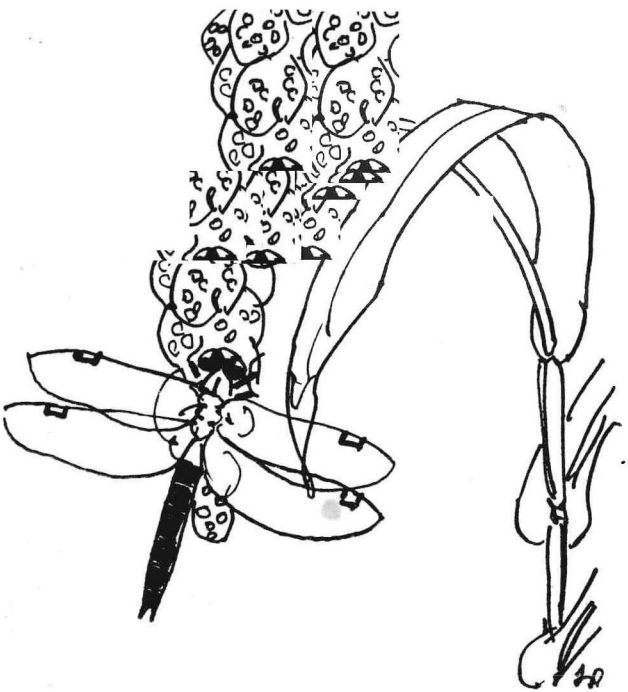
鰯雲

初田傳

雲霧

和田　傳　著



池田書店

著者略歴

明治三十三年神奈川県に生る。大正十二年早稲田大学文学部卒業。第一小説集「平野の人々」以来農民小説作家として終始し、長篇「茯土」（第一回新潮賞受賞）、「家長」「遠い牧歌」「野の真珠」等の他、伝記小説「船津伝次平」「石川理紀之助」、随筆集「五風十雨」「藁草履」「草の蔭」などあり、又近業には「日本農人伝」全五巻の労大作がある。一方、農村の文化、生活の研究家として知られ、「日本の農家」「農村生活の伝統」「新しい村づくり」等の著作がある。現日本農民文学会常任理事、日本文芸家協会員。

現住所　神奈川県厚木市恩名。

© 雲　鰯

昭和三十二年九月二十五日　印刷
昭和三十二年九月三十日　発行

定価　一二五〇円
地方定価　一二六〇円

著者　和田傳

藤沢市鵠沼二五〇一番地
発行者　池田敏子

東京都板橋区志村町一ノ一
印刷者　和田彰三

藤沢市鵠沼二五〇一番地
（東京都千代田区神田三崎町二ノ二四）
発行所　株式会社　池田書店
電話　九段（33）五九六三番
振替口座東京一六五四二五番

本製　三水舎

鰯

雲

装幀
挿絵

三

芳

悌

吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

世間はひろいもので、和助の長男にも嫁が見つかったが、地面をひッぺがしても見つかるまいと思われていたその嫁は、世間はまたせまいもので、ふしぎなこともあればあるものであったというのは、その嫁というのは、二十五年前に別れた和助の最初の妻が、再婚した先で手がけた継娘だというのである。世話する人もはじめからそれと知っていたわけではないが、似たような家を探しあてたあげくのはてである。

似たような家は探せばあるものだと言っても、かかわりなく偶然に落ちていたのではなかった。

農家ではあまり類がなく、長男は二十七にしてしまったが、きょうだい七人というだけでも今時誰も尻込みするのに、その七人が三ツ腹というのでは、地面をひッぺがしても嫁などありっこないと思われた。均分相続は実際にはまだ行われないと言っても、その精神はようやく理解され、そういうことになるものだとは誰も心得るようになってきたから、きょうだ

いの少ないということが財産も同じに思われ出している。

和助の妻女のタネは三番目の後添で、二番目の腹の次男の次に、この腹が三男をかしらに五人ヒシめき、下の四人はみな女である。こういうややこしい構成の員数がヤッサモッサやっている上に、タネは長男の縁談でもはじまるとすぐツノを出してムクれ、世話する人を寄せつけないときていた。

もともと自作農の娘で初婚のタネが、三度目の後添として入ったのには、地主という格に惚れこんだ上に、はっきりと条件がつけてあったというのは、生まれる実子には一町歩の土地をつけて分家させるという約束だったのである。長子相続時代の大正末期のころだったから、富農の後妻というものはみなそのような条件をつけ、老後は実子にカカろうという設計をもって入ったのである。そう言えば二番目の妻も同じで、次男が生まれるとまだ眼もあかぬうちに、ソレ一町歩分けて子供名儀に書換えろと里方の親が迫って悶着となり、剛毅な和助の父親は和助に相談もなしに嫁はたたき出してしまったものだ。

タネの親はそのようなことも言わず、その約束は実際に分家を出すときに実行するということであったのが、戦後の農地改革でそれはホゴとなり、和助はタネにはあたまのあがらぬ亭主になったが、しかし、すぐに子供名儀に書換えておいたとしても結果は同じだった筈

で、農地改革だけは個人を認めず、家に対して行われ、そうしておいてから家を解体し個人にかえしたもののようであった。

分家も、実子にカカろうという老後の設計も潰え、タネが長男の嫁とりに積極的になれない肚を知っては、誰もうかつに世話などできるものではなかったのである。

しかし、タネは陽気で楽天的なところもある女で、和助が遠慮しながらのように、やっとの思いでその嫁の継母にあたるのが、むかし彼の最初の妻だった人だという秘密をうちあけても、かくべついやな顔をするでもなく、

—ふーん、よッぽどこの家がいいんだよ。今度は娘になりかわってこの家にやってきなさるんだね……

と、ケチもつけず、厭味でもなく、むしろおもしろそうに笑って見せた。

—でも、無情なことはするもんじゃないねえ。いつかは仕返しされる。昔の人はエライことをやったよ。

タネは今度は真顔になり、こもった言い方をしたが、そのいきさつは知っているからである。

その最初の妻とも、和助の意志で別れたのではない。麦俵がかつげないような嫁では一生

の不作だと、大力で稼ぎ屋の父親が言い出し、秋になると、稲を刈らせて見、五畝も刈れぬような嫁では家にはおけぬと言い出した。和助は嫌いではなく、父親としてもそれは同じなようであったが、嫁は労力で計られ、和助にロクな相談もなく追い出してしまったのは、嫁は和助のものではなく、家のものであったからだ。

嫁は長男をおいて去ったが、何度も人を介して、子供をくれと哀願してきた。乳が張るというその言い分にも父親は耳をかさず、子供はウチの孫だと言ってことわり、母親は摺鉢で米の粉を摺った。和助は赤子を紐おぶいにして、乳をもらいあるき、そんな姿で麦踏などしたが、それは取返えされる恐さに逃げあるいていたのでもあって、妻とはそれなりの生き別れであった。

タネはそれほど詳しく知っているわけではないが、

—お笑い草さ。いまになればそれ見ろと笑われても、一言もないねえ。ヒドイ仕返えしだよ。

と、笑ったのは、二度目の妻を追い出したいきさつも知っているからで、それとこれとゴッチャになり、土地々々とそれほど血マナコになってもいまはこのザマだと、農地改革のことを言ったのである。

—それでも、新家を一軒出してやっただけがめッけものだったねえ。…そいつはあたったよ。

と、和助の弟に一町歩分けて分家を立てたことを言って、ホトケの悪口をおさめた。

その分家は、少し離れたところにあるが、そこはまた本家とは打って変り、子供は一人しかなく、ヒシめき合う本家を尻目に、親子三人で稼いでは残している。

—でも、二十五年も、その人がそこにいるの、あんたは知らなかったのかね。三里かそこいらのところに…

—二里が三里でも、縁のねえところだものな。…別れてしまえばアカの他人だ。

—二度目のヒトがすぐに来なすったからね。

その二度目のはタネの実家からそう遠くない村の人で、この方は離別後間もなくなったときいている。

—ふーん、じゃあ、おッ母さんとして二十五年ぶりにこの家のシキイを跨がれることになるんだけど、この貧乏にゃびッくりされるね、きっと。…それ見ろと…

—そいつはおやじのせいでも、おれのせいでもねえさ。

農地改革のせいだとは言わなくたってわかっている。十町歩の田畑もいまはない。いまは

泥足でヒシめき合いながら一町八反をコネまわしているガサだけは大自作農だが、下からあがったのではなく、上から落ちたので、貧乏のしつづけである。容れるものもなくなってクモが巣を張っていても土蔵には固定資産税がかかり、ボロ着て泥足で住んでいても家屋なりの資産税はかかると言った仕儀で、貧乏するのもあたりまえである。

—まあ、いっそアカの他人にこんな貧乏を覗かれるより、その方がいいさ、よかったようなもんだよ。

と、タネが言うにも、奥歯にひッかかった調子はなく、ズバリとあけすけで、和助は峠をひとつ越した思いでヤレヤレとするのである。

二

心のいどころが変ってきたのは、最初にそのタネであった。

縁談がまとまると、タネが急に分家へ足を運ぶことが繁くなったのは、婚礼の仕度に泡を食ってあわて出したからだが、そればかりではない。心のいどころが違ってくると、ものご

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

とが違ってき、急に分家がこれまでとは違ったものに見えてくるのである。
実子の三男の将来を案ずるのは、つまりは自分の老後をも考えるからだが、それが案じられてかなわない。この実子にせめて次男くらいの見どころがあればと思うのは、いまはじまったことではないが、これと言った取柄もなさそうで、嫁の新手が加わりでもしたら、テもなく田畑の畔に押出されてしまうのではないかと案じられる。
次男は祖父に似たのか、デキがよかったので商業学校へやり、いまは町の相互銀行に勤めている。むかしは無尽会社と馬鹿にされたのが相互銀行となり、世間からも銀行員と言われ、そのくせ日曜には野良をやり、兄に負けず達者だから、畔に押出されるどころではあるまい。
三男も農業学校へあげようかとタネが言い出したこともあったが、和助が賛成しなかったし、タネも一町歩と農学校を天ビンにかけ、土地の方が確かだと思われた。土地は不動産で、これほど確かなものはなかった。その確かな不動産が翌年には枯葉のように吹き飛ばされ、あわてて農学校へあげようとしたがハネられてしまった。
しかし、この三男にたよるよりほかはない。タネは和助よりヒト回りも若いのである。しかも陽気で大マカなタネは年よりずっと若いのに、和助は苦労のしつづけからまだ五十を出

たばかりなのに真白に霜をかぶり、ひどい老け方だ。
実子に分ける約束の土地は吹ッ飛んでしまったが、土地は分家にある――と、タネが心の深いところでこっそり考えはじめたのも、いまはじまったことではないと言っても、そればかりを考えていたわけではない。しかし、いまは違ってきたのである。
土地は分家にある。その思いは、しかし、誰にも覗かせず深いところに隠し、タネは婚礼の仕度にセッセと分家へ足を運び出した。苦労性なくせに少し悠長な和助の尻をたたいて、ソレ羽織だ、ハカマだとさわぎ出しても、ふところの窮迫はお話にならない。地面をひッぺがして嫁は見つけたと言うのに、仕度ときたら何もできていず、あきれたはなしである。
―大次郎ので間に合わせろ。ヤツは婚礼のとき着たきりで、それから一度だって手を通しちゃいねえから、新しモノも同じだ。
と、尻をたたかれて和助が言い出したのであった。大次郎とは分家の弟である。
羽織もハカマも大次郎の二十年前ので間に合わすことにし、和助が自分でその交渉はしてきて、
―大もやすえも承知だからな、寸法合わせて縫い直してやれや。…なに、否も応もあるもんか。もともと、本家でこしらえてやった品物だ。

Zatei

そういう言い草は和助の口ぐせだ。さアともすると本家でくれてやったものだと言うが、くれてやったのは和助ではない。先代がしたことだ。

そこでタネは分家へ行って品物を見ると、和助の言った通りで、大次郎は嫁とりのとき着たきりだったから、新しモノも同じにシャンとしていた。その後一度も手を通したことがないというのは、大次郎は甲種合格で軍隊にとられ、野砲で耳をやられたのが原因でつんぼになったが、結婚後はそれが急にひどくなって金ツンボになってしまい、表立った場所には出なくなってしまったからである。

羽織も、ハカマも、箪笥の底でスルメのように堅くなっていたが、

—うちにはこんなものあったって仕方ないから、あげるよ。…うちには男はないし、本家は子沢山だし、あげるよ。

と、やすえは気前よく言った。やすえは気前がよく、テキパキ事を運ぶのは、世間へ出ない亭主の代りをするためである。

—ううん、貸してもらえばいいんだよ。

—いいんだよ、あげるよ。…もともと本家で貰ったものなんだからさ。うちには男ッ気はないし、いいよ、本家へ返すよ。

タネはそれをきいてはッとした。和助の口ぐせには馴れているが、やすえの口からそのような言い草をきこうとは思いがけないことである。

タネは蓋の隙間から中を覗かれた思いでうろたえながら、

—何かね、そんなことウチで言いでもしたの？

—でもないがさ、そんな肚もあるらしいようだよ。

と、やすえは笑った。

あけッぱなしで、口も軽いが、人の心を見抜くほどの知恵もあるとは思われぬこの義妹が感じたとすれば、和助はその肚をかなり露骨に見せたものにちがいない。タネは首をかしげる思いだったが、

—いやなことを言う人だね。ウチから貰ったんでもないじゃないか。くれた人はお墓の中だよ。…なーに、借りるだけでいいんだよ。

—でも縫い直さなきゃ駄目だろうからさ、あたしも手伝うよ。うちへ来なさいよ。うちで縫おうよ。

気にもとめていないらしく、やすえは裁縫がニガ手のタネの手もとは承知しているようなことを言った。

—うん、ここの方がしずかでいいね。しずかで、ノンキで…
—うちほどしずかな家はむらにはないさ。
—ノンキなのもむら中にないね。お金はたまるばかりだし…
土間では藁屑に埋れて大次郎が傍目もふらず俵を編んでいる。

三

タネは分家へ裁縫に通い出したが、婚礼の席へ分家として座るのはやすえだから、かの女にもその仕度があって、二人で無器用にそれをやり出した。
大次郎は土間で傍目もふらず藁仕事をしているだけだ。一人娘の浜子の学校の帰りはいつもおそく、タネがいるうち帰ってきたことがない。
縫い直しができあがる日まで、とうとう一度も浜子はタネがいるうち帰ったことがなかったが、その日タネがそのおそい帰りのことに触れると、
—大学へあがるッて言ってるんだよ。先生も勧めるし…

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.